

## ことだま

若林 裕

奨励者紹介[わかばやし・ひろし]

桃山栄光教会牧師

同志社大学神学部嘱託講師

同志社女子大学嘱託講師

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

(ヨハネによる福音書 1章1—5節)

新学期が始まってひと月が過ぎ、初夏の季節を迎えています。今年、入学した人たちもここにおられると思いますが、大学生活には慣れたでしょうか。まあ焦らずに楽しみながらいきたいものです。

### 言葉=ロゴスの力

ところで、私たちは普段、言葉を使って生活をしています。言葉というものは、人間関係を築いていく上で大切なツールであり、コミュニケーション能力の柱とも言えます。いつも当たり前のように話したり、聞いたりしているその言葉ですが、立ち止まってあらためて考えてみますと、そこには目に見えない力が含まれていることに気づかされるのです。

たとえば誰かの言った何気ないひと言で、傷ついたりしたようなことはありませんか。言った方は、何の悪意もなく、他愛ない思いで発した言葉だったかも知れませんが、いやな思いをさせられる…。また、逆のケースもありますね。ふとしたひと言に、心から嬉しくなることもある。仮に全く同じ言葉であっても、自分たちの置かれた状況や語られた場面によっては、その意味が180度変わって受け取られることも起こります。

もちろん、話し言葉だけではなく、読んだり、書いたりする言葉のすべてがそうです。このように「複雑な言葉を操ることができるのが人間。それが他の動物との違いだ」と言われますが、私たちは生活をする上で、自分の思いや考えを、言葉をもって表現します。言葉で物事を理解したり、伝えたりしなければならぬわけです。皆さんは、短いレポートを一つ仕上げるためにもいろいろと考えて、言葉遣い、表現形式に気を付け、結構時間をかけ、苦勞するようなこともあるのではないのでしょうか。

ともあれ古代のギリシア哲学者たちは、そのような言葉のことをギリシア語でロゴスと呼びました。ちなみに哲学事典でロゴスを調べてみますと、そこには言葉と共に、定義、理性、論理、根拠、法則などの意味も記されています。つまりロゴス=言葉にはそんな風に大きな含みがあるのです。たとえば、「万物は流転する」と語ったヘラクレイトスという哲学者は、変わり行く物事の背後に、万物を導く永遠の法則としてのロゴスがあると言いました。このヘラクレイトス以降、哲学の目的はロゴス=言葉の真理探究となっていき

ました。

そう言われますと、私たちが勉強すること、学問を学ぶということも、「ロゴス=言葉の真理を学ぶことだ」と言い換えられるかもしれません。言葉を学ぶとは、英語や外国語といった文字通りの言語の勉強という側面もあります。しかし、それだけに止まらず、そこには数学という言葉の真理を学ぶ。物理学という言葉の真理を学ぶ、科学という言葉の真理を学ぶといったこと、つまり真理探究をなすということなのです。そこに言葉を学ぶことの意味がある。それは言葉の力を知ることです。さらにロゴス=言葉は、我々を超えた存在をも指し示しているのです。

### ロゴス・ダーバール・ことだま

今日読んでいただいた新約聖書、ヨハネによる福音書の最初の箇所は、「初めに言があった」とされています。ちなみに新約聖書はギリシア語で書かれています。それは「エン・アルケー・エーン・ホ・ロゴス」とあります。つまり「初めにロゴスがあった」と記されているのです。そして聖書は、そのロゴス=言葉を「神と共にあった」、「ロゴスは神であった」と言います。さらにヨハネによる福音書が言おうとしているのは、神の言葉としてのロゴス、この真理は、イエス・キリストという具体的な形を取って顕れたということなのです。

しかも、そのロゴス・キリストは、すべてのことに先立って「初めに」存在したというのです。ちなみに、「初めに」という語は、根源とか根拠、言うなれば「すべてのはじまり」を表す表現です。ですから、このヨハネによる福音書の1章は明らかに、旧約聖書のはじまりの話、創世記1章の天地創造の物語の最初の部分を意識して記されている、と。確かにそう言って間違いありません。

旧約聖書、創世記の1章1節にこうあります。「初めに、神は天地を創造された」、3節「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった」と。「光あれ」と神さまが言葉をもって命ずると「光」ができる。このような仕方でドラマチックに世界が造られて行く物語が記されています。

つまり天地万物は、神の言葉によって創造されたのだ、と。それが聖書の基本的な主張なのです。なお新約聖書はギリシア語で書かれていると言いましたが、旧約聖書の方はヘブライ語で記されています。そのヘブライ語で新約聖書のギリシア語のロゴス=言葉に匹敵する表現は、ダーバールという語です。このダーバールは「言葉」を意味すると共に、同時に「出来事」ないし「働き」という意味を含んでいます。神の言葉、神のダーバールが天地を創造する働き、創造の出来事となった。つまり「言葉」、わけても「神の言は出来事を起こす力をもっている」、「言葉は出来事になる」という信仰が、古代イスラエル思想の根底にあったというわけです。

日本にも、同じように言葉が出来事となるという仕方で、言葉に大きな力を見るという信仰があります。今日の奨励題を「ことだま」としておきましたが、「ことだま」とは何か。それをひと言で言えば出来事なのです。良い言葉を発すると良い事が起こり、不吉な言葉を発すると悪い事が起こってしまうということです。だから言葉を大切にしようという信仰です。それが古くからこの国にあった「ことだま信仰」なのです。万葉時代の詩人たちは日本を、「ことだまの幸(さき)はふ国」と詠っています。つまり、「言葉の力で人に幸せをもたらす国」としての在り方を願ったのです。この「ことだま」を漢字で書くと、「たま」の方は靈魂の「霊」、spiritの「霊」と書き、それを「たま」と読みますのですが、「こと」の方は言語、languageの

「言」、言葉の「言」と普通書かれます(言霊)。また、これを出来事の「事」という字で記す人もいました(事霊)。それを重ねると「言葉が出来事となる」ということでしょう。興味深く思います。「言葉が出来事となる」、つまり「ことだま」とダーバールとは共通するわけです。換言すれば、神の言葉は「ことだま」、「ダーバール」は「古代イスラエル人のことだま」ということでしょうか。

### 生きて働くロゴス

なおヨハネによる福音書では、そのような言霊、つまり神の言葉を天地創造の働きだけに限定するのではなく、神が言葉によって、救いをもたらすことを、特に強調して示しているのです。そうです。「言は神であった」と言い、「光あれ」と語られた神が、キリストを通して私たちに語られている。だからイエス・キリストが私たちに語られる言葉は神の言葉であり、絶えず光を放ち、この世の暗闇の中にも輝いて、その御言葉をもって私たち一人ひとりを救い、私たちに励まし、私たちの人生を導いてくれるのだと述べているのです。

このことから、言葉とは生きて働くものであり、大きな力であり、大きな意味があり、私たちにとって、実に大切なものである事にあらためて気づかされます。

ところで今の時代、私たち自身は言葉をどのように捉え、どのように使っているでしょうか。もちろん話し言葉だけではなく、読む言葉、書く言葉を含め、インターネット環境の発達、スマホの普及によって、言葉にアクセスするには、実に随分便利な時代を生きていると言えるでしょう。すごい量の言葉、情報が身近にあります。学ぶとはロゴスを学ぶことだと言いましたが、学ぶ素材に充分恵まれている時代であると言えるでしょう。

### 言葉の洪水の中で

しかし、そんなありがたさと同時に、言葉が多すぎることによって、その言葉の価値が相対的に軽くなっているような気もするのです。おびたしい言葉に振り回されて、真理探究から遠ざけられることもあるのではないのでしょうか。

また一方で私たちは、自らがそんな饒舌とも言えるような言葉の世界の中へと誘われる。時に際限のないようなおしゃべりにはまり込んで行く。そういうことがあります。人は日々の歩みの中で抱える空虚な思いを、何かをしゃべり続けることで埋めようとしているのかもしれませんが、もっとも、そこで何か満たされるものがあればまだしも、その言葉の洪水の中で、右往左往し、心乱されるような経験も続ける。ひたすら飛び交う言葉の中で、言葉が本来もっていた言霊としての言葉、その魂とその本当の力が失われていく危うさも覚えるのです。

先に万葉の詩人たちが、ことだまを大事にしたことに触れましたが、「言霊」と対してよく言われる表現に「言挙げぬ」という言い方があります。この「言挙げぬ」とは、「ことさら言葉に出して言い立てない」こと。つまり「言霊」を信じるからこそ「言挙げぬ」、何かむやみやたらにことさら言い立てて、人を不幸にしたり傷つけるような言葉を発さないということです。ですから万葉の詩人はこの国を「言霊幸はふ国」と同時に「言挙げぬ国」と言い表しました。

新約聖書の中には「文字は殺し、霊は生かす」という表現が出てきます(コリントの信徒への手紙二3章

6節参照)。文字面だけを取り上げると、「人を駄目にし、人を殺す」とまで言う。文字面にコントロールされ、振り回され、気づけば自分がなくなっているということです。本来の言葉には、人を生かす霊、命の働きがあるということなのです。

そのようなことを考えてまいりますと、このような四字熟語が脳裏を走ります。「以心伝心」、元々禅の言葉ですが、要は文字や言葉を使わなくても、お互いの心と心で通じ合うことを言います。そして「不立文字」、悟りは言葉によって書けるものではないから、言葉や文字にとらわれてはいけないということ…。

### 沈黙の声を聞き、語る

聖書には、「立ち止まって、聞け」「静まれ」などということが、しばしば言われます。語る前にまず聞く事、沈黙する事が命じられます。そこに偽りの言葉を見抜く力が与えられるのでしょう。

旧約聖書に、ある古代イスラエルの預言者が聞いた神の声は「静かにささやく声」であったと記されます。英語の聖書はそれを small voice とか gentle whisper と翻訳しますが、原語のヘブライ語を直訳すれば sound of silence となり、「沈黙の音」、「沈黙の声」ということとなります。神の言葉は、圧倒されるような大声ではありません。私たちが言葉の洪水の中で疲れ切ったら、その沈黙の声に耳を傾けようではありませんか。騒ぎだった心を静め、魂を静めて。静寂の中に身を置き、神の慰めと励ましの言葉を聞こうではありませんか。

19世紀の哲学者キルケゴールはこう記していました。「ほんとうに黙っていることのできる者だけが、ほんとうに語ることができ、ほんとうに黙っていることのできる者だけが、ほんとうに行動することができる」(キルケゴール『死にいたる病 現代の批判』梶田啓一郎訳 中央公論新社 2003年 316頁)と。

わけても21世紀のおびただしい言葉の時代を生きる私たちは、力ある言葉、偽りなき真実の言葉を聞き取ることのできる人間、また力ある言葉、偽りなき真実の言葉を語ることのできる者で互いにありたいと心から願います。その時、言葉は私たちにとっての「ことだま」となるはずです。言葉が創造の力、また私たちを解放し、勇気と希望をもって立ち上がって行く慰めと励ましになり、未来を切り拓く大きな力となるはずです。

2017年5月10日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録